

規模別指数からみる日本経済の姿

1999年末以降の株価推移(下の折れ線グラフ)をTOPIX(東証株価指数)とその規模別指数で見た場合、値動きに違いがあることがわかります。

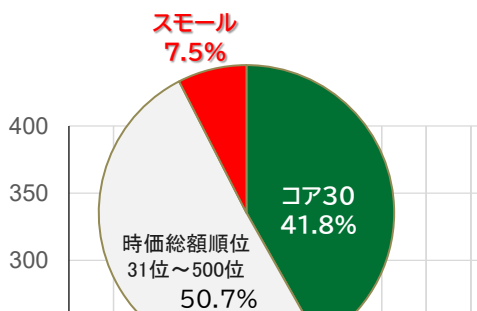
TOPIX採用銘柄の時価総額上位30銘柄で構成された指数であるTOPIXコア30指数(以下、コア30)の値動きは、2012年頃には▲70%(1999年末比)を超えて低迷し、足元でTOPIXがプラス(同)となる中でもマイナス圏を脱せずにあります。

一方、TOPIX採用銘柄の時価総額順位501位以下の銘柄で構成された指数であるTOPIXスモール指数(以下、スモール)は、値動きの振れ幅は大きいものの、足元ではTOPIXの2倍以上の水準にあります。つまり、2000年以降、日本株式が長く伸び悩んだ背景には、TOPIXの時価総額の40%強を占めるコア30(下の円グラフ)の低迷が大きく影響したと考えられます。

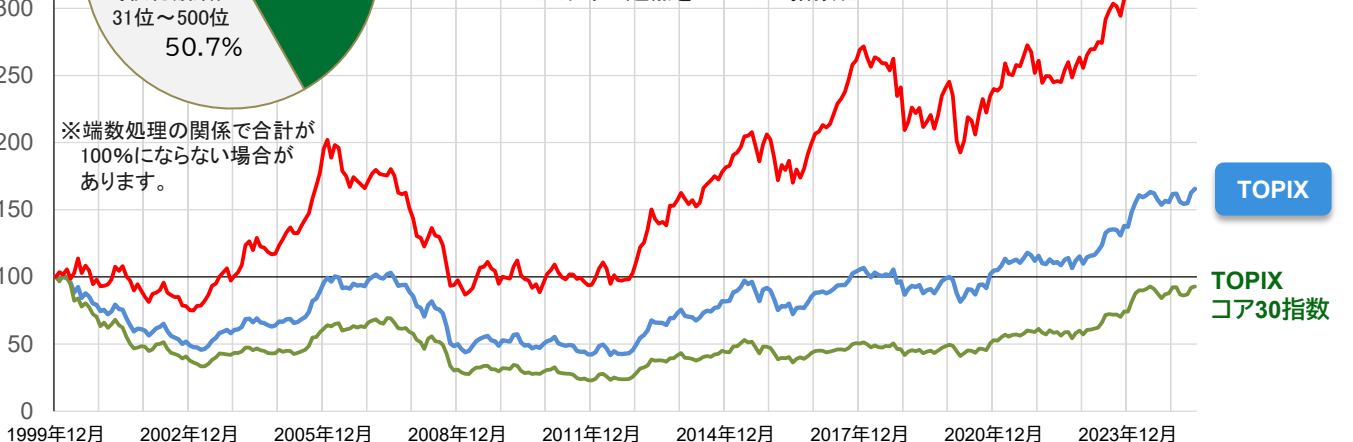
コア30の構成銘柄である大企業は、2008年のリーマン・ショックやその後の急激な円高の影響などを強く受け、業績が振るわない期間が続きました。

TOPIXの規模別時価総額比率

(2025年5月末時点、浮動株ベース)



TOPIXと同規模別指数の推移

(1999年12月～2025年6月、月末値)
※グラフ起点を100として指数化

※上記は過去のものおよび予想値であり、将来を約束するものではありません。

※指数に関する著作権等の知的財産権その他一切の権利は、当該指数の算出元または公表元に帰属します。日興アセットマネジメントが作成

信頼できると判断したデータをもとに